

[浅井学園大学短期大学部人間総合学科] 舞台芸術系の軌跡(2004年4月～2006年12月) (小特集 地域の演劇教育)

著者	村松 幹男
雑誌名	Probe
号	1
ページ	88-100
発行年	2007-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001430/

舞台芸術系の軌跡（2004年4月～2006年12月）

村松 幹男（浅井学園大学短期大学部）

2004年4月、浅井学園大学短期大学部人間総合学科舞台芸術系が発足した。その経緯、カリキュラム、スタッフ、教育の特色、そして2006年12月までの舞台芸術系の動きを簡単に紹介したい。

浅井学園大学短期大学部の沿革

学校法人浅井学園は、1963年に「北海道レスメーカー女子学院」（1939年創設）を母体として、「北海道女子短期大学」を開学した。1997年、「北海道女子大学」の開学に伴い「北海道女子大学短期大学部」と名称を変更。2000年には男女共学となり「北海道浅井学園大学短期大学部」、2005年には「浅井学園大学短期大学部」と名称を変更した。2007年4月より「北翔大学短期大学部」に名称を変更する予定である。本学では2003年4月、従来の服飾美術学科、保健体育学科（体育コース・養護教諭コース）、経営情報学科を統合して「人間総合学科」を開設した。18歳人口の減少、基礎学力の低下など、従来とは異なった環境下において、短期大学部におけるこれからの教育のあり方を検討した結果である。

従来の高等教育は、高等学校までの基礎学力を元に、それぞれの専門性を延ばしていけば良かった。往々にして教員は、それぞれ細分化された専門分野についてのみ教育をすれば良く、細分化された専門領域同士を有機的に結合したり関連付けたりするのは、学生自身の力に任せられていた。しかしながら、本学では早くから、カリキュラム体系を明確にし、それぞれのカリキュラムの関連性を重視し、教員同士の綿密な打ち合わせの上で授業を展開する必要性や、学生の多様化したニーズに対応するためには、硬直化しつつある従来の学科の枠を取り払う必要性等が認識されていた。また、近年の学生が机上の授業だけではなかなかついて来ることのできない現状を認識すると同時に、服飾美術学科のファッションショーや養護教諭コースにおける教育実習報告会のような「イベント」の実施が、学生の学習意欲への強い動機付けとなり、教育効果を高めていることを経験的に認識していた。

そのような認識のもと、「専門教育」・「教養教育」・「編入教育」の3つを柱とする総合教育の実践を行うことを目的に「人間総合学科」が開設されたのである。この学科では、従来の学

科の枠を越え、幅のある学習内容を持つ5つの「系」を導入した（服飾美術系・スポーツ科学系・養護保健系・経営情報系・総合教養系。科目総数は200科目を超えた）。それによって、今まで通りそれぞれの系が有する専門性を深く学ぶことも、複数領域の専門科目を学ぶことも、自分の興味・関心に沿って広く学ぶこともできるようになった。

なお、この学科は、文部科学省の「地域総合科学学科構想」に呼応して設置認可を受けたものである。

舞台芸術系の発足

人間総合学科の6つ目の「系」として、2004年4月から「照明・音響・映像を中心としたバックステージスタッフの養成」を目的とした「舞台芸術系」の新設が理事会で承認された。

「舞台芸術系」は、「演劇の公演をする」という「イベント」を2年間に渡って授業の中心に置くことができ、カリキュラムを通して、「読む、書く、話す」をも含む基礎学力の向上やコミュニケーション能力を涵養することのできる、非常に有効なプログラムであると考えられた。また、イベントを通して他の系とコラボレーションができる系として期待されたのである。

舞台芸術系のカリキュラム

舞台芸術系を発足させるに当り、「照明・音響・映像を中心としたバックステージスタッフの養成」を詠うものの、演劇を

中心とし、身体表現をも含んだ幅広いカリキュラム体系が構想された。カリキュラムを、「照明」・「音響」・「舞台芸術全般」・「戯曲・鑑賞」・「身体表現」・「企画」・「映像」の7分野にわけた。

照明分野：照明概論（含

演習）、舞

台芸術と色

彩、照明総

合演習、コ

ンピュータグラフィックスⅠ、コンピュータグラフィックスⅡ。

音響分野：音響概論（含演習）、音響総合演習、コンピュー

タミュージックⅠ、コンピュータミュージックⅡ。

舞台芸術全般：舞台芸術概論、舞台美術論、演出論、舞台衣

装（含メイク・ヘアメイク）、演劇史（含美術史）、舞台装置入門（含舞台デッサン）、特殊効果。

戯曲・鑑賞：戯曲研究Ⅰ、戯曲研究Ⅱ、舞台鑑賞Ⅰ、舞台鑑賞Ⅱ。

身体表現：身体表現A、身体表現B、身体表現C、舞踊芸術。

企画：舞台企画、アートマネジメント、文化行政研究、



映像：
プロデュース論。

映像概論（含演習）、映像総合演習、
マルチメディア映像、デジタルビデオ
編集。

その他に総合的カリキュラムとして「演劇入門」、
「総合演習A」、「総合演習B」、「総合演習C」、「特別
演習Ⅰ」（中間公演）、「特別演習Ⅱ」（卒業公演）、「舞
台芸術研修」、「舞台芸術特別講義」の計40科目の
専門科目を置いた。「総合演習A・B・C」は、学生
の自主的な観劇や搬入・搬出の手伝い、学生自身に
よる演劇活動等をポイント化し単位を認定するもの
である。観劇に関しては、我々専任スタッフからも
いろいろと紹介したり、チケット購入補助をしたり
している。「舞台芸術研修」は3泊4日の東京研修で
ある（本稿末の「記録（2004年4月～2006
年12月）」参照）。

なお、2006年度に一部カリキュラムを変更し
た。1年目に、より幅広くバックステージ全体につ
いて学ぶため、「照明概論（含演習）」、「音響概論（含
演習）」を統合し「バックステージⅠ」に、「照明総合
演習」と「音響総合演習」を統合し「バックステー
ジⅡ」とした。そのうえで、2年前期「照明・音響
演習Ⅰ」と2年後期「照明・音響演習Ⅱ」を置いた。

表1 2007年度舞台芸術系カリキュラム

2年 後期	特別演習Ⅱ・・・卒業公演																						
	総合演習B（2年前・後期通年）																						
	P 照明・音響演習Ⅱ		P 特殊効果		P 舞臺芸術B		プロデュース論	デジタルビデオ編集															
2年 前期	舞 台 芸 術 研 修																						
	総合演習B（2年前・後期通年）																						
	P コビ・ユヅ・ライカⅢ		P コビ・ユヅ・ミューザⅢ		P 身体表現C		P 舞臺芸術A	アートマネジメント	マルチメディア映像														
1年 後期	特別演習Ⅰ・・・中間公演																						
	総合演習A（1年前・後期通年）																						
	P コビ・ユヅ・ライカⅢ		P コビ・ユヅ・ミューザⅢ		P 舞臺衣裳（含付・ヘア）		演出論		舞臺美術論	戯曲研究Ⅱ	P 身体表現B	映像総合演習											
1年 前期	バックステージⅡ																						
	演 劇 入 門 Ⅱ																						
	総合演習A（1年前・後期通年）																						
1年 前期	演劇史（含美術史）							舞臺芸術概論		戯曲研究Ⅰ		P 演技・ナレーション	P 身体表現A	映像概論（含演習）									
	バックステージⅠ																						
	演 劇 入 門 Ⅰ																						
学期	頭	明	音	響	舞	台	芸	術	全	概	戯	曲	・	産	実	身	体	表	現	企	画	映	像

また1年前期の「演劇入門」を1年前期「演劇入門Ⅰ」と1年後期「演劇入門Ⅱ」とし、それに伴い「文化行政研究」と「舞台企画」を廃止しその中に含まれることとした。1年後期「総合演習A」、2年前期「総合演習B」、2年後期「総合演習C」を、1年前後期の「総合演習A」と2年前後期の「総合演習B」とし、「舞台鑑賞Ⅰ・Ⅱ」、「舞台芸術特別講義」を廃止してその中に含ませることとした。1年後期「舞踊芸術」を2年前期「舞踊芸術A」と2年後期「舞踊芸術B」とした。1年前期に「朗読・ナレーション」を新たに設け、「舞台芸術と色彩」は、服飾美術系の専門科目「色彩学」に吸収させ、廃止した。現在、36科目となっている。

教員スタッフ（敬称略）

「舞台芸術系」の専任教員は、北海道高文連演劇専門部において指導的役割を担っていた顧問の一人であり全国大会で二度最優秀賞を受賞している静修高等学校の森一生と、若手の研究者として進境著しい大林のり子を新たに迎え、演劇活動を続けている村松幹男と主に韓国舞踊を専門とする田光子の4名体制とした。

岡元眞理子（現浅井学園大学生涯学習システム学部学習コアチング学科所属）には、身体表現の中で一部取り上げる「音楽」を担当してもらっている。

非常勤講師には、北海道・札幌において現役で活躍している

トップクラスの方々を迎えることができた。照明関係として勝見昭二（ステージプランニング・KATUMI）、鈴木静悟（フリー）、コンピュータグラフィックスに安藤文絵（フリー）。音響関係として富井昭次（ジョーダウン）、服部正巳（ステージコンサルティング ア カンパニー）、五ノ井浩（ほりぞんとあーと）、コンピュータミュージックには杉本守正（フリー）。装置・美術関係として福田恭一（FUKUDA舞台）、衣裳・メイク関係としてちばくに子（フリー）、藤原得代（クニ美容室代表）、特殊効果として吉田ひでお（アーリオ工房）。戯曲・鑑賞関係としてイナダヒロシ（劇団イナダ組代表）。企画関係として太田晃正（北海道文化財団）、平田修司（北海道演劇財団／TPSチーフプロデューサー）、斗内均（システムアートジャパン）、映像関係として森井綾（現浅井学園大学生涯学習システム学部芸術メディア学科所属）である。

2006年度より「朗読・ナレーション」に松井信子（フリー）を迎えている。



現在、ちばくに子、平田修司がスタッフから外れ、2007年度よりは、安藤文絵と太田晃正が、外れることとなった。

舞台芸術系の教育の特色

a. 学内インターンシップ的教育

非常勤の諸先生方は現役のプロフェッショナルであり(照明・音響分野では、本業を優先してもらうため、複数の講師を配置している)、学生はプロの仕事の仕方・考え方に直接触れることができる。舞台芸術系ではその機会を多く持つために、後述するように、できるだけ公演発表に近い形を授業に取り入れている(c. ポルトホール利用と研究授業参照)。また本格的な公演も2年間で4回(d. 公演発表参照)行っている。これらは、一種のインターンシップ的效果を狙っている(常にプロフェッショナルとの接点を持つ、日常的に行うインターンシップ)。我々は「学内インターンシップ」と呼んでいる。もっとも将来的には、学外で行う正式なインターンシップもはじめたいと考えている。

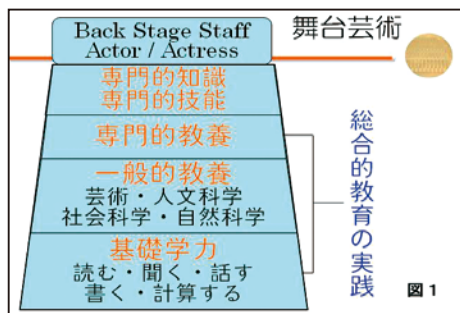
b. 舞台芸術系教育の位置づけ

図1は、プロフェッショナルとして活躍するために獲得しなければならない知識・技能を段階的なフェーズとして表したものである。舞台芸術系は、「基礎学力」・「一般教養」・「専門的教養」の各フェーズを総合的に学ぶ場として捉えられてい

る。我々は「総合的教育の実践」と呼んでいるが、このことについては次節に詳説する。もっともより高度な専門的知識、専門的技術についても、非常勤の教員がそれぞれの分野の現役のプロフェッショナルであることから、学生のやる気しだいでは十分に学ぶことができる環境にある。学生には、学生自身の授業への取り組み姿勢が、そのまま学生自身の評価になる旨を伝え、将来プロフェッショナルとして働きたいと考えている学生への動機付けとしている。

c. 総合的教育の実践(ポルトホール利用と研究授業)

学校法人浅井学園は、2001年に、研究施設北方圏学術情報センター「ポルト」を開設した。ここには客席数400のポルトホールが設置されている(客席が収納できるフリースペーstype。ステージ相当部分の間口21m、奥行8.3m。すのこまでの高さは8.45m。16バトン。内電動バトン1本)。舞台芸術系が開設された2004年当時、第1次研究プロジェクト



クトが5年計画で進んでいた。そこで舞台芸術系では、学術プロジェクト推進拠点事業「北方圏住民におけるQOLの向上に関する総合的研究」の「学校・地域連携研究」プロジェクトに途中参加させてもらい、2006年から始まる新たなプロジェクトの準備を始めた。主な研究テーマは「演劇教育を通じた新しい教育方法論の構築」と「地域連携によるアウトリーチ・プログラムの開発」である。

前述したように、大学の教育環境は大きく変化している。少子化と進学率の向上の中で、大学生の基礎学力の低下が社会問題になり、少子化や地域社会の変化等によるコミュニケーション能力の欠如の問題もクローズアップされている。

そのような環境下における新たな教育方法論の構築を目指して、具体的にポルトホールを利用した以下のような研究授業を行っている。

カリキュラムの体系化、個々の専門科目の関連付け等の必要性を考え、従来のように週に1度(90分)ひとつの科目を行うような時間割ではない、やり方を試みている。

月曜日の1講目から4講目までを、指定した舞台芸術系の専門科目だけにしてもらった(舞台芸術系の学生は舞台芸術系の専門科目の他に、他大学の教養科目に相当する基礎カテゴリーの科目も受講しなければならない。その中には「英語コミュニケーション」や「情報機器操作」、「人間学」のような必修科目もあり、それらの科目を月曜日に入れないようにしてもらった

のである。もちろん他系では月曜日にもその系の専門科目が開講されている)。例えば2006年度では、1年目前期は「演劇入門Ⅰ」・「バックステージⅠ」・「朗読・ナレーション」・「身体表現A」、1年目後期は「演劇入門Ⅱ」・「バックステージⅡ」・「演出論」・「特別演習Ⅰ」を指定している。そのような時間割にもらった上で、実際の講義/実習は、科目を離れて総合的に教育している。半年分のスケジュールを組み、時には照明の授業を2コマ連続行ったり、照明と音響の授業を同時に行ったり、場合によってはTV放送局見学に行ったりしているのである。学生たちは、江別校舎を離れてポルトに集まり、一日中舞台芸術系科目のみを学ぶ。もちろん、休憩時間も他の系の学生と接することは物理的にもできない。

また、このポルトでの研究授業では、照明・音響・舞台機構・発声・トレーニングなどの基本的な事柄はそれぞれ学習するが、できるだけ早い段階で総合的な実践に入る。この実践教育の中核をなすのが、「5分間ストーリー」と呼んでいる試みである。これは「総合的教育の実践」の具体的な展開であり、そこにあるスバイラル的展開と重層的展開によって、教育効果が高まると考えている。

「5分間ストーリー」は、5分から10分間の短い作品を実際の発表まで持つて行くものである。この小作品は演技者が2名〜5名ほどの作品であり、学生たちは、演技者、照明、音響、演出等の役割分担を行い、5名から8名ほどのグループに分か

れて発表する。1作品に2週間から3週間かける（10コマ相
当時間プラス空き時間利用した自主練習）。

「5分間ストーリー」には実にいろいろな利点がある。

その一つは、実際に発表することによって（またはその課程
で）知識・技能不足に気が付き、新たな知識・技能の習得への
意欲を高める結果になる（知識獲得への動機付け）。新たに獲
得した知識・技能をもとに再び実践を行えば、それは前回より
は高いレベルの実践となるであろう。と同時により高い知識・
技能習得への意欲を掻き立てることになる。こうして、スパイ
ラル的に知識・実践レベルが向上していく（図2）。

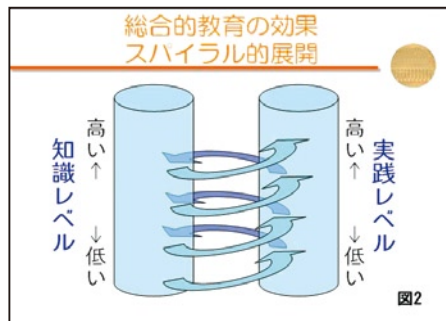
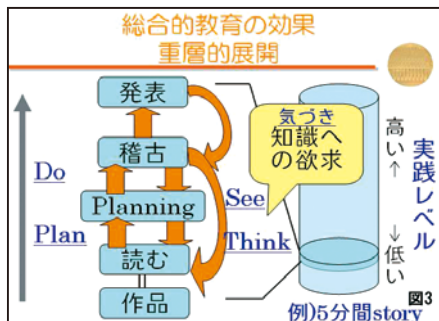
また、一つの発表を通して、作品の提示、読み、プランニング、
稽古、発表という流れの中で、いわゆる Plan、Do、See、
Think のサイクルを実践することができる（「気づき」「知
識への欲求」。一つの実践レベルにおいても、実践とフィード
バックのサイクルがあり、知識・技能への欲求が高まる（図3）。

同時に、当然のことながら、作品を作り上げていく課程（一
つの実践レベル）で、十分な話し合いが必要であり、常にコミュ
ニケーションすることが要求される。これらを通して協働する
ことの楽しさ、難しさも経験していく（コミュニケーション能
力、プレゼンテーション能力、コラボレーション能力の涵養）。

この力は一般企業において
非常に重視されている能力
であり、たとえば舞台芸術に
おけるプロフェッショナル
になれなかったとしても、
身に付けておく必要がある
（図4）。

また、図5のように、基
礎学力の低下を補うことが
できる。特に、読む力、話
す力、書く力というものを
知らず知らずのうちに向上
させることができる。

なお、2006年度より
正式な「舞台芸術プロジェ
クト」が発足している。研
究テーマは「地域の劇場を
拠点に展開する舞台芸術の
実践と教育に関する研究」
である。本誌はこのプロ
ジェクトの一環として創刊



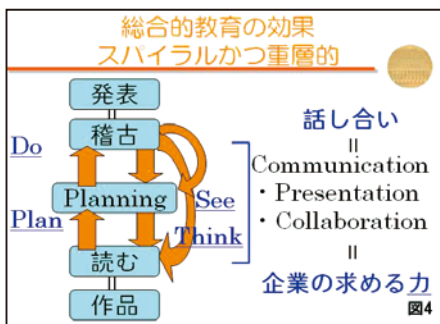
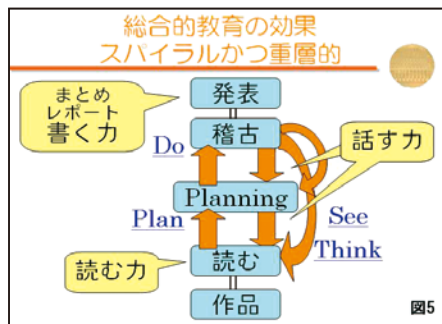
された。

2006年1月には、高文連石狩支部演劇専門部と連携したワークショップ、「高校生のための『演劇教室』」を開催し、2007年1月にも「冬季ワークショップ」を行う予定である。

d. 公演発表

舞台芸術系では、2年間の学生生活の中で4回の発表を行っている。1年前期終了時に「1年目試演会」、1年後期終了時（実際には2年目の5月）に「中間公演」、2年目前期終了時に「2年目試演会」、そして2年目の12月に「卒業公演」である。

「1年目試演会」は、大学のバル6Fを利用し大学祭時に発表を行っている。



「中間公演」は、新1年生への動機付けをも視野に入れつつ、ホールでの本格的公演を行っている。「2年目試演会」は脚本選びから発表、公演収支まで全て学生の手で行わせる。最後の「卒業公演」は、2年間の集大成ともなるよう、本格的公演をホールで行っている。「中間公演」と「卒業

公演」に関しては、海外のわりと古典的な脚本で行い、出来る限り脚本に忠実に公演している。戯曲を読み込み、それを表現できるかどうかを問うているからである。この方針に関しては、現在検討を加えている。大林は、カナダ・レッドディアアカレッジの試みについて報告「カナダのコミュニティ・カレッジにおける演劇教育」（北方圏生活福祉研究所年報Vol. 12参照）を行った。また、本誌には、堀田氏が「大阪芸術大学舞台芸術学科・バックステージスタッフ教育への取り組み」を寄稿してくださった。今後、先人達の試みを調査・検討しつつ、浅井学園の舞台芸術系に相応しい形にしていきたいと考えている。



第1回卒業公演
ガラスの動物園 2005年12月

e. 体験

舞台芸術系が発足した2年目からは、宿泊を伴った自主研修旅行をおこなっている。2005年度は富良野演劇工場の見学、2006年度はあさひサンライズホールでの実習を行った。

「舞台芸術研修」では、東

京研修を行ない、劇団四季観劇・バックステージツアー、歌舞伎の鑑賞、国立劇場・国立劇場のバックステージツアーを行った(2006年度は国立能楽堂のバックステージツアーも行った)。

また、劇団四季が札幌公演を行うときには、可能な限りバックステージツアーをさせてもらっている。

まとめ

以上、舞台芸術系の発足の経緯、カリキュラム、教員配置、教育の特色について、まとめた。

ちょうど3年間を終わろう



2006年 東京研修旅行



2005年 富良野研修旅行

としている現在、総合的教育の実践を通して、その利点、問題点も見えてきている。それらは表裏一体でもある。

例えば週1回ポルトホールにおける研究授業を通して、舞台芸術系の学生同士の一体感ほかの「系」に比べても非常に醸成しやすくなっている。しかしながら、それは同時に「系」内でのグループ化を強めてしまったり、一種の一体感についてくることのできない学生の反発や離反を生じやすくなってしまったりするのもまた事実である。一度そのような状態になった学生を復帰させるのはなかなか難しい。

また、できるだけ総合的な授業を行いたいと考えていても、学生は興味のないことには全くやる気をみせない。反面学生は多様な欲求を持っており、それらひとつひとつに対応するのは、物理的、時間的、人的にも難しい側面がある。

いろいろ生じる問題は研究授業の重要な研究テーマの一つとして、解決していききたいと考えている。

標準テキストの準備や、教育方法論の改善などを今後も進めていく予定である。



韓国舞踊

記録(2004年4月～2006年12月)

2004年

4月

舞台芸術系開設1期生入学(16名)。

8月

試演会(森 一生作「母」 パル6F)。

2005年

2月

中間公演(イナダヒロシ作「ジェンガ」 ポルトホール)。

3月

ステージASA I(ポルトホール)

舞台芸術系の学生が主体となり、ダンスとファッションショーの舞台発表を行った。ファッションショーは、服飾美術系学生とのコラボレーション。浅井学園大学生涯学習システム学部芸術メディア学科の学生が制作したビデオアートも放映した。

4月

2期生入学(27名)。

5月

劇団四季「オンディーヌ」札幌公演バックステージツアー。

6月

富良野研修旅行(富良野演劇工場見学)。

富良野演劇工場見学をメインに富良野市観光を含む1泊研修旅行。

7月

1期生2年目試演会(ポルトホール)。

1期生東京研修

3泊4日の研修旅行。劇団四季「ライオンキング」・歌舞伎の鑑賞等を行った。また、四季劇場、国立劇場、新国立劇場のバックステージツアーを行う。自由時間には観劇を勧めた。

8月

2期生1年目試演会(パル6F)。

9月

カナダ・レッドディアカレッジ研修(村松・大林)。

10月

日本演劇学会秋の研究集会。

12月

日本演劇学会の研究発表の照明・音響・会場(接待)などを舞台芸術系の学生が行った。

1期生卒業公演

(テネシー・ウィリアムズ作「ガラスの動物園」ポルトホール)



第1回 卒業公演 ガラスの動物園 2005年12月



第2回 中間公演 奇蹟の人 2006年5月

浅井学園大学短期大学部人間総合学科舞台芸術系2学年卒業公演

ガラスの動物園

〜Glass Menagerie〜

作・テネシー・ウィリアムズ
演出・村松幹男
演出助手・小山沙織

出演・堀亜矢 関根積恵 澤田彩加 鳥羽公文
スタッフ・日野由美子 松下卓夫 高崎絵梨果
野宮枝利果 太田ひかり 櫻井知紗 山本朝子

2005年12月15日(木)
開場18:30 開演19:00

北方圏学術研究センター
ポルトホール
札幌市中央区南1条
西22丁目1番1号

お問い合わせ・村松幹男
TEL: (011)387-3969(直通)
E-Mail: muramatsu@asaigakuen.ac.jp

じえんが

作・イナダヒロシ
演出・森一生

キャスト・天部ひかり
小山沙織
関根積恵
高崎絵梨果

スタッフ・日野由美子
堀亜矢
松下卓夫

美術スタッフ・藤井昭二
照明・藤井昭二
音響・藤井昭二
衣装・藤井昭二
メイク・藤井昭二
ヘア・藤井昭二
メイク・藤井昭二

2005年12月15日
夜場19時開演 夜場5時半開演
北方圏学術研究センター ポルトホール
札幌市中央区南1条西22丁目1番1号

連絡先 村松幹男
TEL: 011-387-3969
FAX: 011-387-3969

▲ 北海道浅井学園大学短期大学部人間総合学科舞台芸術系 中間公演

学生作成の公演ポスター

2006年

1月

高文連石狩支部演劇専門部と連携したワークショップ。

「高校生のための『演劇教室』」。高文連石狩支部演劇専門部と舞台芸術系が連携して、高校生のための「演劇教室」開催。ポルトホール。高校生が150名ほど集まり、朗読劇を創った。

3月

ヨーロッパ研修旅行（浅井学園大学・短大企画行事）。

1期生卒業。

4月

3期生入学（25名）。

5月

2期生中間公演（ギブソン作「奇蹟の人」ポルトホール）。

芸術の森アートホール実習。

教育文化会館小ホール実習。

6月

土別市朝日町研修旅行

旭山動物園見学後、あさひサンライズホールへ。1泊2日の研修旅行。

サンライズホールでは、バックステージツアーの他、実際にホールを

利用しての実習を行った。

えぼあホール実習。

教育文化会館小ホール実習。

2期生東京研修

7月

2期生東京研修

前年に引き続き3泊4日の研修旅行。劇団四季「クレージー・

フォー・ユー」・歌舞伎鑑賞を行っ

た。

四季劇場、国立劇場、新国立劇場

バックステージツアーの他に、国立

劇場、国立劇場、新国立劇場



試演会 海よりも長い夜 2006年8月



試演会 トランス 2006年9月

8月

能楽堂のバックステージツアーも行った。
3期生1年目試演会（平田オリザ作「海よりも長い夜」パル6F）。

9月

2期生2年目試演会（鴻上尚史作「トランス」ラグリグ劇場）。

12月

劇団四季「異国の丘」ワークショップ参加。

劇団四季「異国の丘」バックステージツアー。

2期生卒業公演（テネシー・ウィリアムズ作「欲望という名の電車」えぼあホール）。



第2回卒業公演 欲望という名の電車 2006年12月



学生作成の公演ポスター

浅井学園大学短期大学部 人間総合学科舞台芸術系 第2回中間公演

ウィリアム・ギブスン 作

The Miracle Worker
奇蹟の人

～ものには名前がある～

asaigakuen

2006年5月20日(土)

開場 17:30
開演 18:00

北方圏学術情報センター
ボルトホール

入場：無料 (札幌市中央区南1条西2丁目1番1号)

お問い合わせ：村松祥男 Tel:011-387-3369(直通)
E-Mail: muramatsu@asaigakuen.ac.jp